

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02036

研究課題名(和文) 戦後文化運動に見る地方都市の光芒-北九州八幡製鉄所における職場雑誌からの検討

研究課題名(英文) The Postwar Cultural Movement in Local Cities: A Study of Workplace Magazines at Yawata Steel Works in Kitakyushu

研究代表者

西田 心平(Nishida, Shinpei)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：00449547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では戦後の北九州八幡製鉄所およびその周辺の文化運動に注目することで、地方工業都市における労働者の表現と思想の系譜を明らかにすることに努めた。文化運動の素材は約30種類の職場雑誌やサークル誌等(約400冊分)である。その所蔵元は北九州市立文学館、北九州市立図書館である。その他、国会図書館や大学図書館、労働組合や個人蔵によるものである。成果については、資本(会社)と労働者(会社員)、労働組合の関係を「分断と抑圧」「断絶と連続」「復興と展開」「成長と闘い」という視点からまとめた。その成果を社会的に公表するために、「北九州、文化運動の軌跡」というテーマの展示会を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの文化運動の研究では、対象雑誌がカバーする「範囲」は限定されていた(1950年代が中心)。今回の研究では戦後の約50年間をカバーすることで文化運動とその後の市民運動の関係、もしくはその重なり部分を明らかにする視座を得ることができた。またその成果を社会的に還元することで180名に及び市民に公開することができた。

研究成果の概要(英文)：By focusing on the cultural movement in and around the Kitakyushu Yawata Steel Works in the postwar period, this study sought to clarify the genealogy of workers' expressions and ideas in a local industrial city. The materials of the cultural movement consist of about 30 workplace magazines, circle magazines, etc. (about 400 volumes). The collection is housed at the Kitakyushu Municipal Literature Museum and the Kitakyushu Municipal Library. Other sources include the National Diet Library, university libraries, labor unions, and private collections. Regarding the results, the relationship between capital (companies), workers (company employees), and labor unions was summarized from the perspectives of "division and oppression," "rupture and continuity," "reconstruction and development," and "growth and struggle. In order to publicize the results of the project, an exhibition entitled "Kitakyushu, Trajectory of the Cultural Movement" was held.

研究分野：社会学

キーワード：戦後文化運動 八幡製鉄 職場雑誌

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地域開発によって発展した戦後日本の近代化は、中央ではなく地方都市においてこそリアルな現実を浮かび上がらせることができる。そのような視座のもとで、日本の近代化を工業分野で牽引した北九州を対象とする社会学的研究の基盤づくりのために今回の研究テーマが設定された。

地方の都市・地域形成を扱った研究としては、一般に政治学や経済学、都市計画などにおける一事例としてのアプローチが中心である。そうでない場合は、逆に、地方の郷土史や地域史などといった個別かつ限定的な範囲を扱った一地方の研究群として位置づけられてしまうことが多い。

だが、本研究が目指したのは、一地方都市のあり方を日本の典型例とするような、あるいは一事例研究と地方研究との間に位置づく、まさに中範囲のような意味での、普遍性と個別具体性を同時に有する研究的視座の確保である。

北九州という都市は、かつて日本の近代産業の基盤を支えた八幡製鐵所を有し、戦後は旧五市による対等合併を経て、各区の一体化を軸とした都市づくりに邁進してきた。だが、近年は人口の低減や製造業の空洞化、政令市で最高の高齢化率に至るなど、様々な課題に直面している。その系譜は、まさに近代の成長から衰退までを含めて、日本のトップランナーとして駆け抜けてきた姿に重なるものがある。

北九州という都市は日本の近代化を具体的かつリアルに問い直す上で、格好の素材であり対象としての潜在力を有している。その上で、そのことを歴史上、思想史上、または社会運動史上の系譜として浮かび上がらせることが普遍性と個別具体性を実現する上で大事な視角であると考えた。

また工業都市であった北九州の特性からして、そのことを企業や労働者、組合運動、地域との関わりの軌跡から浮かび上がらせることがより現実的である。そこから、これらにまつわる政治や経済、運動、地域のあり方が集約的に表れているものとして「北九州の文化運動」を一素材として扱うことにした。

2. 研究の目的

本研究のテーマは「戦後文化運動に見る地方都市の光芒 - 北九州八幡製鐵所における職場雑誌からの検討」であった。「北九州の文化運動」を八幡製鐵所およびその周辺で生まれた職場雑誌およびサークル雑誌に代表させて、その戦後の軌跡を明らかにすることを目的とした。

ただし、文化運動研究は素材となる雑誌等の収集状況に影響される側面が強い。本研究では、八幡製鐵所およびその周辺で発行されたすべての雑誌を対象とし得たわけではない。ひとまず北九州市立文学館、または個人所蔵の雑誌を収集・読解することを同時並行的に行うことで可能となった。結果として研究期間(2018~2022年)において対象となったのは、職場雑誌・サークル誌約30種類(冊数にして約400冊分)である。

3. 研究の方法

対象となる雑誌の中で軸となったのは、八幡製鐵所が発行していた職場雑誌『製鐵文化』である。収集できた限りでは、少なくとも1949年~2002年(179号)まで最も長く発行されていたことが明らかになった。同所内の社員親睦団体である親和会教養部が発行し、毎号、「創作」、「随筆」、「短文芸」、「写真」などの各欄を配置していた(各号の平均ページ数は43ページ)。従業員どうしや経営者との公共的・コミュニケーション的な機会を提供する媒体として機能するものであった。また社内の組合運動の一環としてつくられていた文化サークル団体の表現・発表の場としても存在していた。

本研究では、「北九州文化運動会」と題する共同研究会を発足させ、年に2回ほどの研究会を実施する中で、『製鐵文化』の読解と内容分析の報告を行ないながら共有を図ってきた。またその過程で特徴的な書き手たち(製鐵所従業員)が会社外で新たなサークル誌や文化活動を立ち上げ、八幡製鐵所での活動を柱としながらも、抵抗的な文化運動を展開した形跡を発見することもできた。

その離合集散が最も濃密であったのが、戦後40年代から高度成長へと至る60年代半ばであった。その現実の一端を戦前にも一部さかのぼりながら、発行された雑誌名や特徴的な書き手を中心にまとめるならば、以下のような成果として論じることができる。

4. 研究成果

4-1 職場から始まった文化運動

八幡製鐵所で最も早い時期、1919(大正8)年に刊行されたのが社内報『くろがね』である。目的は、会社が労働者に関係する規則や仕事上の心得などを伝えることにあったが、同時に娯楽を提供するという福利厚生側の側面もあった。文芸欄が設けられ、発刊以降、散文や短歌、俳句、川柳などの投稿が充実した。1940年代以降、戦時体制が深まるにつれて、産業報国会に関連す

る記事が誌面を埋めるようになる。

1941(昭和16)年には、八幡製鐵所内の文化団体を束ねた産業報国文化会が設立された。それまでの文芸欄も「産報文化だより」、「産報文壇」、「産報文化特集」と名称が変わり、投稿のテーマが絞られていく。その中で、岩下俊作や志摩海夫は小説や詩を書いた。産業報国文化会の設立にともない創立された日鉄詩人会は、1942年頃、『日鉄詩人会報告書』を刊行している。そこでも志摩海夫などの名を見ることができる。

八幡製鐵所内の文芸サークル「川柳くろがね吟社」が1928年に創刊したのが『川柳くろがね』であった。だが、戦局の悪化にともない1930年に休刊。1953年に復刊し、現在も刊行中である。北九州における小説や詩、俳句や川柳などの文化活動の軌跡は、八幡製鐵の職場の中に息づいていた。

4-2 岩下俊作たちの軌跡

直木賞候補作「富島松五郎伝」とその映画化「無法松の一生」の大ヒットで知られた岩下俊作は、敗戦直後から旺盛な文学活動を展開する。1945(昭和20)年11月、職場同僚であった志摩海夫、辻旗治とともに『浪漫』(全6号)を刊行する。戦後最も早く刊行された詩誌であり、劉寒吉、淵上喬、伊波南哲、風木雲太郎、東潤、徳永寿、夢野文代、各務章など『九州文学』関係者も多く寄稿している。1946年3月、八幡製鐵所監理部安全課から月刊新聞『緑十字』が刊行される(全157号)。所内の安全情報が中心であったが、岩下の随筆や志摩の詩などが掲載された。

1948年5月、岩下は若い所員の小説修練の場として創作研究会をたちあげ、翌年4月には機関誌『創作研究』を刊行する。「永い人生を賭けても把握出来ぬ芸術の秘密は案外勤労者の素朴で逞しい手に依って掴むことが出来はしないか、—そんな念願と意図をもって私達は新しい前進をはじめたのである」と「創刊の言葉」に記されている。第1号には、芸術至上の境地を実験的手法で描いた岩下「人工楽園」のほか、大塚正「虚舟」、隈部発志「落日の影」、久野耕一「父心点描」が掲載されている。同年8月に刊行された第2号には、石山滋夫「黒い構図」、双水孝「うさぎの家」、津留龍次郎「虱」が掲載されている。教師であった石山は社外からの参加。「創作研究」は2号で終刊するが、創作研究会は『製鉄文化』創作欄に発表の場を移しつつ、精力的な活動を続けていった。

4-3 八幡製鐵が生み出し、支えたもの

『製鉄文化』の発行母体であった親和会教養部には、戦前から続く「詩人会」や「川柳くろがね吟社」を始め、「文学サークル」「創作研究会」「歌と鑑賞の会」「青嶺俳句会」など、多数の文芸サークルが所属しており、それぞれが『製鉄文化』に寄稿するほか、独自の機関誌の発行や合評会といった活動を行っていた。また、「製鉄所の中にもいろんな職場に「文学サークル」が来ている」(『文学サークル』第1号)とある通り、「一製鋼文学サークル」「二化成文学サークル」といった、部署ごとに組織された文芸サークルの活動も確認できる。同時に、1949年2月創刊の「創作研究会」の機関誌『創作研究』が『製鉄文化』の創刊に伴い1年も経たずに休刊となり、1949年1月創刊の「文学サークル」の機関誌『文学サークル』も2年弱で休刊となるなど、そうした個別のサークルが常に資金や人手の不足に悩まされていたのも事実である。

他方、1948年には製鐵所内の文学・演劇・美術・音楽などの各サークルによって「文化サークル協議会」が結成され、文学コンクールも開催している。1949年12月には機関誌『文化サークル』も発刊された。また、他企業の職場サークルとの交流もあったようで、1949年2月には八幡製鐵所の文学サークルと八幡市役所文学サークルや安川電機文学サークル等が中心となり、「北九州文学サークル協議会」が結成されたという記録があるが、その後の活動は確認できていない。

4-4 職場内雑誌の広がり

1950年代、の八幡製鐵所では、『製鉄文化』の書き手たちが他の職場雑誌を主導していった。高田一夫を中心に発刊されたのが、職場版画集『手押車』だった。多色の手刷りによる雑誌である。高田は、『製鉄文学』創刊号の表紙も担当。『製鉄文学』では、新羅純、入江恒雄の詩が掲載された。

八幡製鐵俳句会によって刊行された『金属地帯』では、井上菁城、属朔夏などを選者とした活発な活動が伝わってくる。製鉄詩人会発行の誌文誌『座標』では、志摩海夫の他、末次勇、樺島豊、重田久丘子などが詩を書いている。日本におけるシュルレアリスムを代表する画家・寺田政明(八幡市生まれ)がたびたび表紙を担当した。原田種夫や滝沢克己、猪城博之の寄稿もみられ、詩と思想を牽引していった。さらに、『荒土』(八幡製鐵文学研究会)が復刊されたのもこの時期である。中門英幸の詩や、新羅純の小説が発表されている。

一方、『童研』(八幡製鐵童話研究会)は、阿南哲郎、石松楨樹を顧問とし、日高輝一や藤原弘幸、樺島豊などが執筆した。童話作品だけではなく、児童施設や炭坑の公民館などで、人形劇や童話会などを行った実践の記録が誌面から確認できる。サークル活動のなかでも、子どもたちへの取り組みに特化した珍しい存在だった。

4-5 八幡製鐵周辺における文化サークルの萌芽

八幡製鐵所の周辺でも、演劇や「うたごえ」をふくめ、活発な文化運動が見られた。1950（昭和25）年から1958年にかけて、文学サークル誌の『あかい木馬』『自由詩人』『やわた』『黒い眼』『骸人群』『鉋石船』『鉄と花』や、文芸同人誌『螺旋』『日曜作家』が、八幡市にて創刊された。短命の雑誌が多いなか、詩誌『鉄と花』と『日曜作家』（第1次）は長く続いた。これらには、下請・孫請で働く労働者を加えるならば、製鉄関係者も多数が関わってくるが、むしろ「製鉄」内の文化状況への対抗意識が、その活動の支えとなっていた。

佐木隆三をはじめ、『日曜作家』の同人たちは、離合集散を繰り返しながら、『労働北九州』から北九州国民文化会議の『緑と太陽』へと活動を展開し、1970年代の北九州地区の市民運動にも影響を与えることとなる。その萌芽は、この時代にあった。

4 - 6 労働組合主義の流れ

1960年代、労働組合にとっての闘いの柱は、主に賃金の引上げと労働時間の短縮であった。そこには労働組合の目的をあくまで労働条件の改善や経済的地位の向上におき、社会の変革といった政治的な意図と切り離す考え方が根底にあった。労働組合主義の思想である。1962（昭和37）年、八幡製鐵労働組合の中に、こうした考え方に立つグループやサークルを束ねた「労働組合主義者連絡協議会」が設立される。組合が発行していた『組合運動』という雑誌は、その機関誌として位置づけられた。

一方、こうした動きに対して、労働者の中から文化活動による社会の変革への可能性を探ろうとする声も上がる。同じく組合が発行していた『熱風』の中で、当時、文化サークル協議会会長であった高田一夫は、文化活動の主題と政治は無関係ではあり得ないと論じた。当時、組合員であった佐木隆三もまた、文化活動を通じて労働者意識を高めることの重要性を語っていた。その『熱風』の小説欄の選者をつとめていた新羅純は、八幡製鐵で働きながら小説を書く労働者のことを「職場作家」と呼び、職場作家こそが職場の中に取り残された「本質的な問題」を書くべきであると訴えたのであった。

4 - 7 八幡製鐵の文化サークル運動

1948（昭和23）年、八幡製鐵労働組合の教育宣伝部の下に文化サークル協議会（文サ協）が発足した。文学、映画・劇、美術、音楽、その他あわせて24団体が加盟する文化組織であり、1949年に機関誌『文化サークル』を創刊した。創作、詩、短歌、俳句、川柳、戯曲は工場労働者の仕事と生活を描いた。しかし、レッドパージによる指導層の解雇により、加盟団体は半減、活動は停滞した。

1964年には、詩のグループ「詩炉社」は『詩炉』を創刊した。内容は製鉄だけではなく、東京オリンピックやベトナム戦争といった時事問題も取り入れ、作風もモダニズム的だった。新入会員や会員外の枠も設け、積極的に新しい風を取り込もうとした。

1970年、八幡製鐵と富士製鐵の合併により新日本製鐵が誕生した。それにともない労組が変わるタイミングで、文サ協は何か足跡を残したいという意欲から新しい『文化サークル』を創刊する。13団体が加盟し、『詩炉』の詩の会、川柳くろがね、短歌会、製鉄俳句会、童話研究会、写真会の作品が掲載された。近況を述べるエッセイが多いなか、文サ協事務局長だった高田一夫がレッドパージの頃を回想したり、久野耕一が『文学サークル』の活動を振り返ったりするなど、1950年代のサークル運動をよく知る人々のエッセイは貴重な記録になっている。

4 - 8 八幡製鐵周辺の文化サークル運動

『製鉄文化』や『熱風』では飽き足らない労働者たちが、表現の場を求めて新しい雑誌を生み出していく。その一人・佐木隆三が『日曜作家』の同人仲間であった小塩信二らとともに創刊したのが『新社会派』だった。その第2号で佐木が発表した「ジャンケンボン協定」は、のちに第3回新日本文学賞を受賞する。1963（昭和38）年に中門英幸らと創刊した『労働北九州』の中で、佐木は自分たちの文化活動を初めて「文学運動」ないし「文化運動」と呼んだ。創刊号に掲載された「個性の回復期」という論評の中で、自立した「文学運動」の意義や、仲間との運動形成の必要性を訴えている。

こうした運動のうねりは時の政治とも共鳴し合う。1964年、『労働北九州』は北九州市発足にともなって誕生した革新市政のスローガンからとった『緑と太陽』という雑誌名に改める。その後、メンバーの中村節生らが創刊したのが、『えすぎぶと』という雑誌だった。北九州の労働者たちの間で、働くことと結びついた表現のあり方が最も鋭く問われたのがこの時期である。それは八幡製鐵所の成長とともに地域社会が変化し、「働くことの意味」が大きく変わろうとしていた時代の現れだった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 西田 心平	4. 巻 第38巻
2. 論文標題 「創作」から「運動」へ - 佐木隆三における表現（1956-1964）の軌跡 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北九州市大学基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 61-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 楠田 剛士	4. 巻 3巻19号
2. 論文標題 震災小説としての『私の男』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紋説	6. 最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 楠田 剛士	4. 巻 20巻
2. 論文標題 『ヒロシマ・ノート』再読のために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 原爆文学研究	6. 最初と最後の頁 158-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川口隆行	4. 巻 129号
2. 論文標題 カストロフィの忘却と想起 ポスト「3・11」の歴史的地層	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本學報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川口隆行	4. 巻 98巻12号
2. 論文標題 『ヂンダレ』と『琉大文学』に見る広島・長崎・ピキニ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國語と國文学	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西田 心平	4. 巻 第35・36合併号
2. 論文標題 親和会の系譜 - 『製鉄文化』への視座 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北九州市立大基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠田剛士	4. 巻 18
2. 論文標題 青来有一『爆心』の読まれ方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 原爆文学研究	6. 最初と最後の頁 172-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楠田剛士	4. 巻 3-17
2. 論文標題 桐野夏生『だから荒野』における師弟のわけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紋説	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楠田剛士	4. 巻 12
2. 論文標題 荒野を描く：テレビドラマ『だから荒野』における炭鉱と原爆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 層 映像と表現	6. 最初と最後の頁 4-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/92297	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西田心平	4. 巻 32号
2. 論文標題 「地域と向き合うこと」への道程－教育的な視座のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川口隆行	4. 巻 17号
2. 論文標題 来るべき協同作業にむけた覚え書き 三者への短い応答	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 原爆文学研究	6. 最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川口隆行	4. 巻 98号
2. 論文標題 『原爆を読む文化事典』の編集を振り返る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 251-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠田剛士	4. 巻 17号
2. 論文標題 「炭鉱と原爆の記憶」を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 原爆文学研究	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 楠田 剛士
2. 発表標題 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』再読のためのノート
3. 学会等名 原爆文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 カタストロフィの忘却と想起 ポスト「3・11」の歴史的地層
3. 学会等名 韓国日本学会第102回 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 原爆という災難の文学的な再現の様相 在韓被爆者支援と二人の詩人
3. 学会等名 朝鮮大学校災難人文学事業団第11回国内外優秀学者招請特別講演 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 在韓被爆者支援と文学 深川宗俊と御庄博美
3. 学会等名 日文研共同研究会「戦後日本の傷跡」第7回（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楠田剛士
2. 発表標題 青来有一『爆心』の読まれ方
3. 学会等名 第59回原爆文学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 四國五郎のシベリア抑留体験 表現と運動の軌跡
3. 学会等名 日露国際学術ワークショップ「戦後モンゴルとシベリアにおける日本人抑留者」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 山代巴の表現と運動 『原爆に生きて』にみる社会運動と文化生産の問題
3. 学会等名 第87回民衆思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口隆行
2. 発表標題 50年代サークル運動研究と原爆文学研究をつなぐ
3. 学会等名 「アメリカ問題、東アジア冷戦文化研究の現状と課題」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 楠田剛士、岡村幸宣、奥村華子、木村至聖
2. 発表標題 炭鉱と原爆の記憶 文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える
3. 学会等名 第56回原爆文学研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 楠田剛士 野邊文博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 宮崎 文学の旅刊行委員会	5. 総ページ数 324
3. 書名 宮崎 文学の旅 下	

1. 著者名 坪井秀人、川口隆行他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 8
3. 書名 運動の時代 (『戦後日本を読みかえる』第2巻)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

北九州文化運動研究会
https://kitakyu-bunka.sakura.ne.jp/
北九州文化運動研究会
https://kitakyu-bunka.sakura.ne.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川口 隆行 (Kawaguchi Takayuki) (30512579)	広島大学・教育学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	楠田 剛士 (Kusuda Tsuyoshi) (20611677)	宮崎公立大学・人文学部・准教授 (27601)	
研究分担者	高山 智樹 (Takayama Tomoki) (70588433)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------